狼少女と精霊

抹殺完了

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ノンビリ呑気に愉快に自由にが彼女のモットー

彼女は自慢のケモミミとシッポを揺らしながら、失った記憶を探しながら色々な精霊達と出会ったり恋したする話

目　次

第1話　乱入 ―― 1
第2話　ドーモ、ナイトメア＝サン ―― 4
第3話　ヘンテコな精霊　モン ―― 7
第4話　モンと狂三 ―― 10
第5話　機密資料 ―― 14
第6話　士道とプリンセス ―― 17

第1話　乱入

「おーおー派手にやってるねー」

愉快そうに言う彼女は半壊したビルの上に居た、灰色のフードを深く被りビルに座る若い女の下半身には黒いおおよそ人間には無いであろう大きな尻尾があり彼女が人間で無いという事は明白だ。

「おっと…あの子は確か……お姫様かそして空を飛んでるのはメカメカ団、全くけしからんぞメカメカ団！女の子に寄ってたかって！羨ましい！」

台無しである

彼女がいるビルの少し離れた場所では黒髪の奇妙なドレスを着た女の子が刃幅の巨大な剣をパワードスーツを着て空を飛ぶ複数の女に向け刃を振るう。

一振りでまるで暴風の様に砂が舞き上げられる、そんな嵐の様な攻撃をパワードスーツの集団はその攻撃をかわしながら、銃やミサイル等で回避するがドレスの少女はその場で動かずに剣を振るう。

その攻撃でミサイルは少女に到達する前に爆発され、銃弾も弾き飛ばされた。

「何時見てもお姫様は強いな～、しかも可愛いし」

その戦闘行為をビルの上から足をブラブラとしながら鑑賞をしているが、そんな最中彼女は不可思議な人物を見かけた、明らかにこの戦場に不釣り合いな学生が居た。

このままあの男子学生が新鮮なお肉になって定価２５０円位でスーパーに売られてしまう…其れは駄目だ食品衛生的に駄目だし何より一般人が死ぬのは絶対に駄目だ。

其処からの彼女は速かった、何時もはマイペースな彼女だがこの様な場合だと人一倍速いのだ。

直ぐさま立ち上がり着ていたフード付きジャンバーを脱ぎ捨てる、すると……彼女の頭には黒い獣の耳が！そして服も離れた場所で戦っているお姫様の様な青いドレスを着ていた！

摩訶不思議だが彼女は気にも留めずに戦場に向かって駆け出した。

ＰＰＰＰＰ‼？
男子学生のポケットに入っている携帯が鳴る、先程迄異様な静けさを醸し出していた為その音は一際大きく聞こえ、其れが膠着状態になっていた戦闘の再開させる音となった。
パワードスーツを着た女の子と奇妙なドレスを着た女の子が同時に駆け出し己の獲物を振るう。
獲物同士がぶつかる前に彼女達の頭上を影が覆い尽くす、現在の天候は晴れだ其れこそ雲ひとつ無い…ならこの影は？
「なっ……！」
「なにっ⁉？」
二人は咄嗟に攻撃を中断しその場から退避する、その直後二人が居た場所に何かが降ってきた、相当な重量だったのだろう凄まじい音と土煙を上がる。
微かに男子学生の悲鳴が聞こえたが……
「一体…何が？」
咄嗟の判断で回避したパワードスーツの女は目眩がする頭を振りながら、何かが落ちた場所を見る、其処には土煙で良く見えないが微かに見えた…見えてしまった。
彼女の額に大粒の汗が垂れる、状況は最悪と言っても良い。
ただでさえ強力な精霊『プリンセス』が居るにも関わらず更に厄介な精霊が現れてしまった。
その精霊は比較的大人しい精霊と言える精霊が現界する際に発生する『空間震』も余り大きな規模では無いが……
そん中未だ晴れぬ土煙の中から新たに入って来た侵入者らしき人物の声が聞こえてきた。
「ドーモ、メカメカ団の皆さんそしてお姫様、私はあなた達が言う所の『フェンリル』です…ガゥ」

フェンリルと自ら名乗った精霊は未だ見えぬ敵に対し威圧的に威嚇した。

第2話　ドーモ、ナイトメア＝サン

「メカメカ団？」
　パワードスーツを着た女の子　鳶一折紙は首を傾げる
「貴女達の事だよほらメカメカしてるし集団だし」
「……私達はＡＳＴ」
「アイスクリーム・タクティクス？」
「アンチ・スピリット・チーム、貴女達精霊を殺す者」
「あら物騒」
「精霊よりマシ…何故貴女は邪魔をする？プリンセスとは関係ない筈」
「関係あるさ同じ精霊だし」
「そう…」
　言うや鳶一折紙は自分の獲物を構え土煙漂う場所へ掛ける、その速度は尋常では無く並みの……いや人間が到底出せない速度で接近。
「グゥゥゥ⁉？」
　精霊　フェンリルに到達する前に彼女の腹は金属で出来た腕に殴られていた、そして鳶一折紙は宙を舞い地面を２～３回バウンドする。
　遂に土煙が晴れた…其処には灰色のペイントを施された無骨なロボットと肩に乗るフェンリル…彼女が居た。
「ガゥ…手加減はした筈、ふふいい子いい子」
　敵対者に慈悲なき攻撃を喰らわせ倒した後、彼女は威嚇の様に吼えた後殴った状態のまま静止するロボットの頭部を愛おしく撫でる、此れがフェンリルの恐ろしい所であり厄介な所でもある。
　何処からともなくこのロボットは出現し、フェンリルを守り敵対者を迎撃する…其れをＡＳＴは『守護者（アイギス）』と呼びフェンリルの形を持った奇跡『天使』と断定していた。
「鳶一⁉？」
　上空から悲鳴の様な叫び声が聞こえたと同時にフェンリルとその背後に居るプリンセスに意味の無いミサイルや銃弾が殺到する、先の

プリンセス戦での消耗の所為か火力は先程よりも無いが…其れでも充分な火力だ。
「『クーガー』‼?」
　フェンリルが叫ぶ、クーガーと呼ばれたロボットはフェンリルが必要と感じている行動を瞬時に理解し、直ぐさま二人の精霊の前に立ちはだかり盾となった。
　ミサイルの直撃による連続した爆発と銃弾が襲うが等のクーガーには傷一つ付いておらず、逆に背中に担架しているマシンガンを取り出し反撃を開始した。
「ッ‼?全員退避‼?」
「さて…大丈夫かいお姫様?」
　攻撃を開始したクーガーの後ろにいるフェンリルがプリンセスに対し無事かどうか聞く、プリンセスは巨大な剣を消し好意的な表情を此方に向ける。
「おぉ!『モン』ではないか!うむ勿論無事だ」
「其れは良かった、今の内に逃げると良いよアタシも直ぐ逃げるから」
「ありがとうだ!モン!今度お前が言っていた『デェト』に行こう!」
　そう言った後プリンセスはこの場から消えて言った、隣界という所に消えていったのだ。
「さて…とアタシも逃げるとするか」
　その言葉に反応する様にクーガーのカメラアイが光り、地面に向けマシンガンを撃ち更に手榴弾を投げＡＳＴ達の視界を遮る。
　その間にクーガーは腰部にあるスラスターを吹かしながらフェンリル…モンを拾いながらその場から逃走していった。

「うまく巻けたかな?」
　フードに隠しているケモミミをピクピクと動かしながらモンが呟く。
「全くもぉーほんとメカメカ団は鬱陶しくて敵わないよ、と言うかア

タシ達精霊が何をしたのさ…」
　ケモミミをペタリと倒しながらそんな事を言う、確かに自分達精霊は現界する際に色々と壊したりしているけどだからって、命を狙われるのは正直たまったもんじゃない。
「全くですわね、私達は良い迷惑ですわね」
「…！」
　背後から声を掛けられたモンは垂れたケモミミを直ぐに立て、尻尾もブンブンと振る。
　と言うのも声を掛けてきた人物は彼女が好きな精霊だったからだ、彼女は背後を向き断片的な記憶を頼りにしながら奇妙な挨拶をした。
「ドーモ、ナイトメア＝サン。モンです」

第3話　ヘンテコな精霊　モン

「お久しぶりですわねモンさん」
　ナイトメアと呼ばれた片目を髪で隠している端正な顔立ちの美少女は慣れているのかモンの奇妙なアイサツに疑問を持たずに話し掛ける。
　彼女の名前は時崎狂三　モンと同じ精霊であり、モンを助けた命の恩人と言うべき人物だ。
「久しぶり狂三！わーい！」
「あらぁ…」
　そんな狂三にモンは久しぶりに会えたのが余程嬉しかったのか、狂三に勢い良く抱き着く。
　狂三は勢い良く抱き着かれるが、まんざらでもない様で頭を撫でる撫でられる度にフードに隠れたケモミミがピクピクと嬉しそうに動く。
「ふにゃあ」
　気持ち良さそうに大人しく撫でられるモンを見て狂三は珍しく穏やかな表情を見せる。
　時崎狂三は精霊の中では非常に危険で残忍な分類になる、其れはＤＥＭ社やそしてモンの共通の意見でもある。
　なら何故そんな危険な精霊にモンは懐いているのか？
　簡単だ恩を返す為と時崎狂三の過去を知り彼女の目的を達成させる為だ、勿論モン自身にも利益がある。
「ふふ…相変わらずですわねモンさんは」
「そりゃあ人間もどき…ううん、精霊はそう簡単に変わらないよ」
「其れもそうですわね…それにしてもモンさんは可愛いですわね」
「そうかな？」
「そうですわ」
　そう二人の精霊は会話をしながら、街を歩くが…その途中で狂三と一緒に居るのが余程嬉しかったのかキャッキャとはしゃぐモンだが…周りを見えていなかったのか、明らかにガラの悪い男の身体にぶつ

かる。
「うわわっ」
「あら…」
　バランスを崩して倒れそうになる所を狂三が身体を支え、倒れずにすんだ
「大丈夫ですかモンさん？」
「うっうん…」
　心無しかモンの顔が赤くなりながら曖昧に答える、其れもそうだろう目の前に…目と鼻の先に同性でさえ見惚れてしまう程の美貌の持ち主が居るからだ。
「其れは良かったですわ…全く嬉しいのは私もモンさんに会えたのはとても嬉しいですけど…周りをちゃんと見ないと駄目ですわよ？」
「うっ…御免よ……後胸当たってるよ」
「違いますわよモンさん、当たってるのではなくて当ててるのですわ」
　まるで誘っているのではと間違える様にとてもいやらしい笑みを此方に向けてくる、そんな表情を向けられただけで頭がクラクラして今直ぐにでも目の前の愛おしい精霊を滅茶苦茶にしたいし逆に滅茶苦茶にされたい…でも駄目！今は我慢！
　モンは知ってる、狂三のあぁ言う表情は後でシようと言うサインと言う事を、だからモンは可能な限りの理性を用いて頑張って欲求を抑える…モンはいい子で我慢が出来る子。
「ふふ…其れじゃぁ参りましょうモンさん？」
　狂三はそう言いモンの手を握り、ガラの悪い男達の間を抜けようとするが…ガシッと狂三の腕が掴まれた。
「あら、あら？」
「なぁ嬢ちゃん方そりゃあねぇよな？謝りもしないでどっか行くとかそりゃあねぇよな？」
「山原の言う通りだよなぁ…っておいおい！随分可愛いじゃねぇかこの子ら！」
「おぉ！こりゃあ大当たりだな！ねーねー、君達ぃお名前なんていうのー？てか暇ぁ？」

「此れは…また随分古典的ですこと」
狂三が呆れ果てる程、彼等のナンパは古典的過ぎてそして近付きたくなるような魅力も無い酷い誘い方だった。
さて…此れから如何しようか食べる価値も無い小物だが食べようか、そう考えながらふと…隣に居るモンを見た。
「……」
お気に入りのおもちゃを取り上げられた子供の様にえらく怒っていた。

第４話　モンと狂三

人が滅多に来ない路地裏、其処に二人の美少女と数体の血で真っ赤に染まって居る『人間だったもの』が転がっていた。
話は少し遡る、狂三とモンはガラの悪い男達に囲まれてしまい程度の低いナンパをされていた、狂三はこの事態を如何しようかと隣に居るモンに声を掛けようと隣を見る。
「……」
威嚇は幸いしてはいないが…其れでも非常に危険だ、此の儘では街のど真ん中で殺しかねない…其れは不味い非常に不味い、下手をすれば厄介な事になる。
「お兄さん方…もしかしてわたくし達と交わりたいのですの？」
つまりはこの男達を人目につかない場所で始末してしまえばいい、狂三とモンは幸いな事に人を殺す事に躊躇いはない。
そうして狂三は妖しい笑みを浮かべながら男達に言う、当然ながらその笑みは先程モンに見せた表情とは比べ物にならないが。
その言葉を聞いた男達は少しの間ポカンとするが、直ぐに元の調子に戻り色めき立つ、対して心配そうに服の端を掴むモン。
全く…こう言う所がいちいち可愛いのですわと心の中で言う、最初に会った時の様な残虐な彼女だったらどれだけ楽だったのだろう…いや、其れは其れで手は焼くだろうが。
「大丈夫ですわモンさん」
服を掴むモンの身体を優しく抱き締め彼女にしか聞こえない音量で耳元で呟く、囁けば彼女はくすぐったそうにしながら身をよじる。
「でも…」
「大丈夫ですわモンさん、あの殿方達に身体なんか触れさせませんわ」
「うん…」
モンは恥ずかしそうに小さく頷く、其れに答える様に狂三は微笑み其の儘男達に向き直る。
「少し場所を変えませんこと？ここですと人目に付いてしまいますわ」

また男達は色めき立ち、狂三とモンを囲う様にしながら路地裏に入って行った、暫く歩けば袋小路になっていて半ば二人は追い詰められた様な格好となった。
男達のリーダーらしき人物が一歩前に出るその表情は下劣だった。
「それじゃあ早速」
そう言い手を伸ばし止まった
「おい…ヤラねぇのか?・なら俺が…」
「おい…あれ……」
手を伸ばしたまま止まった男を訝みそのまま、二人に手を伸ばそうとして隣にいる男に止められ良く見てみる。
男の首筋から赤い何かが噴水の様に出ていた……あれは……血?
「何で?・」
何で目の前にいる友人の首筋から血が吹き出ているんだ?
呆然とする男達を尻目に男の首筋を噛み千切り殺したモンは無感情に彼等を見ながら肉を噛みそして飲み込んだ。
食うのに値しない程不味い肉だった、そう頭の中で思いながら次の獲物達に狙いを定めそして獰猛な狼の様な表情をして男達に飛び掛った。
其れから男達は数分も経たずにゴアめいた肉片になっていた、フェンリルと呼ばれている彼女にとってこの様な事は赤子の手を捻るよりも簡単な事なのだ。
「全く…あんまり散らかしては駄目ですわよ?・」
狂三の声と共にゴア肉は地面に否影に吸い込まれていく、これは狂三の天使の能力の一つだ。
「其れにこの殿方達はわたくしが食べようと思っていましたのに」
残念そうに言う狂三だが其れは?・だ、この男達は食うには値しない小物だと…だが彼女は食べようとした、モンが食べるより自分が食べた方が良い。
彼女はもっと良いものを食べた方が良い…だからこそ自分が彼等を食べるようとしたが…彼女よりも速くモンが動き男達を食い散ら

かしてしまった。
「でも…狂三が食べたらお腹壊しちゃうよ？アタシは身体丈夫だから大丈夫だけど…うぅ不味かった」
ゲンナリとするモンを見ながら狂三は微笑む、内容は物騒極まりないがモンの暖かい表情につい緩んでしまう。
……わたくしがこんな子と一緒に居ても良いのでしょうか？
ふとそんな事を頭に過る……いやモンさんはわたくしに付いていくと言って下さった…この自分勝手なわたくしに…だから良い……一緒に居ても
「モンさん…」
俯いていた顔を上げ自分の大切な人を見ようとするが当の彼女は居なかった…文字通り影も形も
「えっ……」
混乱する頭で何とか考える…自由奔放な彼女だが勝手に居なくなる様な事は無い、其れこそＤＥＭが言う『消失』でもしなければ
「……あぁ」
忘れていた、彼女も自分と同じ精霊なのだつまりただ…ただただ単純に消失して臨界に行っただけなのだ。
「はぁ……わたくし…モンさんに依存しているかも知れませんね」
一安心しながらポツリと呟く
「出来る限り早めに此方に来て下さいまし？」

「グワッハハハハ‼?」
「な……何よ…此処⁉?」
　準精霊と呼ばれる存在の彼女はこの不自然な空間に困惑する、確かに自分は臨界のいたって普通の空間に居たはず……なのに目の前にいる正体不明の準精霊か分からない存在に襲われ、そしてこの不気味な空間に居た。
　空に人が居て自分達がいる地には誰も居ない、そして空も地面も白黒だった
「ググググ…この空間はキリングフィールド・ジツ、コロス・ニンジャクランが造った固有結界見たいなジツ…と言ってもグググ……分からないか」
　そう正体不明の化け物が可笑しそうに不気味な笑い声を出す、たったそれだけで肌が粟立つ。
「ググググ……さぁてニンジャはアイサツをしなければならないな…だが……グワッハハハハ‼?ウチはニンジャでは無い！だがニンジャのジツが使える‼?グワッハハハハ‼?グワッハハハハ‼?」
　何が楽しいのか化け物が狂った様に笑い続ける…逃げないと！
「逃げないと…」
　そう直ぐに背を向け何処に逃げるべきか分からないが無我夢中に飛ぶ……
「ドーモ初めまして、モンです」
　必死に逃げていた筈なのに目の前に化け物が不気味な笑みを浮かべながら、訳のわからない挨拶をして来た。

第５話　機密資料

ＤＥＭ本社其処にある資料室その更に奥に厳重に保管されている資料がある、その資料を見る事が出来るのはほんの一握りしか居ない、例えばＤＥＭ社業務執行取締役『アイザック・レイ・ペラム・ウェストコット』世界最強の魔術師でＤＥＭ社のナンバー２　悠久のメイザース『エレン・ミラ・メイザース』らだろう。

その厳重に保管されている資料其れは資材Ａ　資材Ｂに関する資料だ。

即ち世界に二番目と三番目に現れた精霊に関する資料の事だ。

資材Ａは今現在もとある研究所に幽閉されているだが…資材Ｂは数年前に幽閉されている研究所に『ナイトメア』が襲撃しその際に逃げられたのだ。

警告

この資料はＤＥＭ社業務執行取締役、取締役、第二執行部の職員のみ回覧が許可されています。

許可されていない者が回覧した場合、適切な処置が施されます。

資料にアクセス中ーー

資材Ｂ　識別名　ジェノサイド

第一の精霊よりは規模は低いが其れでも巨大な空間震を引き起こ

す、この精霊の出現で南半球　オーストラリア大陸が丸々消滅した『南半球大空災』を引き起こした精霊であり、ジェノサイドが保有する天使、霊装には謎が多い。

外見的特徴

ジェノサイドは西洋人の容姿をしており、身長はおおよそ１７０ｃｍ頭髪の長さは腰まであり色は金髪。

彼女のもっとも身体的特徴をあげるとすれば、頭部そして臀部から生えている獣の耳と尻尾だ。

経歴

南半球大空災の後、彼女は何度が出現する様になった奇妙な事に出現位置が全て海上だった事と空間震の規模が驚く程小さかった事からジェノサイドは空間震の発生位置を決め規模の調整が出来ると推測される。

そして、数度の出現からジェノサイドの討伐隊が結成された。

２×年×月×日７：３０　太平洋　セレベス海

この日にジェノサイドが出現した、当時の討伐隊は現第二執行部部長　エレン・ミラ・メイザースを筆頭に最精鋭の部隊が編成された。

結果はエレン・ミラ・メイザースを除く討伐隊が全滅し作戦は失敗に終わった。

唯一生き残ったエレン・ミラ・メイザースが証言するには、ジェノサイドは回転ノコギリやタケヤリあるいは近代的な銃そしてエレン・ミラ・メイザースと同型のＣＲ―ユニットを用い攻撃して来たと証言し、ジェノサイドの天使が創造系の物と推測される。

２×年×月×日１７：００　大西洋サルディーニャ海

第一次作戦が失敗に終わった２年後に大西洋サルディーニャ海にジェノサイドが出現した、その際サルデーニャ島とバレアレス諸島が丸々消滅した。

この第二次作戦には立て直した第二執行部、イギリス軍所属対精霊

部隊　スペシャル・ソーサリィ・サーヴィス、イギリス海軍、ＤＥＭ社所有空中艦数隻による討伐隊が編成された。
午後２２：４５分
大多数死者を出しながら、大破炎上していた空中浮遊艦　アブラメリンが特攻し自爆した際にジェノサイドが気絶し捕獲に成功した。
捕獲に成功したジェノサイドは前に捕獲に成功した資材Ａ　識別名　シスターとは別の施設に幽閉し、シスター同様の実験を開始した。
実験は難航した…其れから三年後新たに出現した精霊により施設が襲撃された、その精霊自体直ぐ様鎮圧されかけたがジェノサイドを幽閉していた場所から、黒いスライム状の物が溢れ…幽閉して場所を破壊しジェノサイドが脱走した。
その際にジェノサイドは見境無く攻撃し同施設に駐屯していたアブラメリンＩＩを破壊し精霊と共にその場から消えて行った。
この事件から施設を襲撃した精霊の識別名を『ナイトメア』とした。

最後に我々ＤＥＭ社は何としてでもジェノサイドを捕獲しなければならない、彼女の天使は凡ゆる可能性を我々に見せ付けてきた。
そして余りにも危険過ぎる為にさらなる被害が出る前に捕獲をしなければならない。

第6話　士道とプリンセス

「俺は…お前を否定しない」
　誰も居ない学校…たった二人しか居ない学校そのある教室内で、少年はダンと地面を踏み締めながら目の前にいる少女に言った。
　その言葉に少女は眉をひそめながら少年から視線を逸らす…初めてだこんな事を言われるのは…厳密には同じ精霊以外の話だが、何時もあの空に飛ぶ変な奴等モンが言う『メカメカ団』に常に自分の事を全て否定された…だから私は望まない剣を振るってきた、今までずっとただ否定されるのが嫌だから…
「……っ」
　だが…目の前にいる人間は今まであったどの人間とも違う
「シドー…シドーと言ったか？」
「あぁ」
　彼は自分を否定しなかった…まるでモンだ、彼女も自分の事を否定せずに肯定してくれた、初めてだこんな人間は
「本当に私を否定しないのか？」
「本当だ」
「本当の本当か？」
「本当の本当だ」
「本当の本当の本当か？」
「本当の本当の本当だ」
「……ふん」
　間髪入れずに答えるシドーに参ったのか、髪をくしゃくしゃとかき向きを元に戻す。
「誰がそんな言葉に騙されるかばーかばーか」
　精一杯の強がりを言い、シドーが何かを言う前に言葉を紡ぐ
「まぁ……だが…どんな魂胆があるか知らないがまともな会話をしようとしてきた奴は二人目だ……」
「二人目？」
「うむ、シドーに会う前に良く私に話し掛けて来た精霊がいるのだ」

『二人目？士道の他に会った人物がいたって事？しかも精霊…』
シドー…士道と精霊　識別名　プリンセスが居る学校の上空に其れはあった
其れの名はフラクシナス
ラタトスク機関と呼ばれる秘密組織が誇る最新鋭空中艦である、その空中浮遊艦は不可視迷彩を使い姿を隠している。

精霊の対処には二通りの方法がある
一つ目　武力による制圧
これはＡＳＴ、ＤＥＭ社そして世界共通の方法だが…精霊自体強力な為非常に困難を極める。
そして二つ目此れがラタトクス機関が用いる方法…対話による空間震災害の平和的な解決である。
その具体的な方法こそ、今学校にいる士道…五河士道だ。
更に具体的に言えば、精霊に恋をさせ『デレ』させるのだ
そうする事で精霊の力を封印する事が出来る、つまりラタトクスと言う組織の理念を達成するには五河士道と言うごく普通の高校生が必要不可欠なのだ。
これはラタトクスにとっての戦争　デート・ア・ウォー
そして精霊達に生きる道を示す　デート・ア・ライブになる。

その空中浮遊艦　フラクシナスの司令官『五河琴里』は好物のチュッパチャプスを咥えながら神妙な顔で呟いた。
『士道その精霊について聞いて頂戴』
通信機から士道の小さく分かったと言い、プリンセスに話し掛ける。

「なぁ…その精霊について教えてくれないか？」
「むぅ…本当は私がシドーに色々聞こうと思ったがまぁ言い」
　頬を膨らます彼女だが直ぐ様元に戻り、少しニコニコしながら士道に自分に良く話し掛けて来た奇妙な精霊について話した。

『……ありがとう士道、その子が言ってた精霊は『フェンリル』よ』
「フェンリル？」
『ええ…奇妙な挨拶に獣の耳と尻尾で分かったわ…まぁ確かにこの子の言う通り変な精霊よ』